


夏だ！わいわいフェスティバル

平成17年7月27日
ハイマート佐仲

西紀地区の小学校児童を対象に、人と自然のふれあいを通じて明日の地域を担う青少年や児童の郷土愛を育むことなどを目的として「夏だ！わいわいフェスティバル」を開催して、約130人の参加があった。

メインの「大うどん流し大会」は、佐仲ダムの堤防にある144段の階段を利用した全長約80mの竹樋2本に、子供達が手打ちしたうどんを流して食べるというもの。時折、サクランボやプチトマトなどを流した時には、参加者は争奪戦の様相で我先にと箸を伸ばしていた。

その他、約1メートル四方の大きな鉄板を利用したジャンボホットケーキづくりや手づくり灯籠などを行い、参加者にとって「いい夏の思い出」になった。




第53回 丹波篠山デカンショ祭

平成17年8月15・16日
篠山城跡三の丸広場

篠山支部事業の中でも、最大のイベントである「デカンショ祭」。運営主体であるデカンショ祭実行委員会の中核として、企画から実行を担っている。

昨年は両日で16万5千人の来賓者を迎え、西日本最大のヤグラを囲んでの総踊りでは、浴衣で彩られた踊りの輪が絶えることなく大いに盛り上がった。その他にも、デカンショ踊りコンテスト「競演会」や可愛い踊りが好評の市内小学生以下で行う「ジュニア競演会」、市街地パレードやステージ、巨大露天街や花火など、多彩なイベントで丹波篠山の夏の風物詩を飾った。



たんなん商工まつり

平成17年9月25日
四季の森生涯学習センター前広場

たんなん商工まつりは、事業者が地域住民と親しく交わり、つながりを深め、地域の活性化が前進することを願い毎年開催しているもの。丹南支部でも女性部と合同のもちつき大会で大いに祭を盛り上げた。

杵でつきたてのお餅は飛ぶように売れ、お客さんにお餅がつかあがるのを待っていたり程盛況であった。



焼き物の里のイルミネーション ～雪花に先んず 真の壺～

平成17年12月13日～平成18年1月15日
兵庫陶芸美術館

昨年10月にオープンした「兵庫陶芸美術館」の活性化と地元住民に楽しんでもらう事を目的にイルミネーションの点灯を実施した。LEDライト(発光ダイオード)で施設内の植栽に約5000球の光の花を咲かせ、焼き物の里らしい丹波焼の灯籠「陶灯(とうろう)」が施設内にやさしい光を灯した。



篠山市商工会青年部は… **その他にみんな事業を実施・協力しています。**

4月 桜の防虫駆除【篠山支部】	10月 丹波たんなん味覚まつり【丹南支部】
7月 桜の下草刈【丹南支部】	丹波ささやま味まつり協力【篠山支部】
こんだこども万博2005【今田支部】	丹波焼陶器まつり出店【今田支部】
8月 にしきふるさとまつり【西紀支部】	1月 いのしし祭企画・運営【篠山支部】
9月 桜の防虫駆除【篠山支部】	2月 桜の防虫駆除【篠山支部】

商工会青年部活動報告

平成17年4月19日

通常総会

合併後初の通常総会が平成17年4月19日にユニピアささやまで開催され、多くのご来賓にご臨席いただく中、平成17年度事業計画及び予算計画等の全ての議案が承認され、小西隆紀部長の下に新生篠山市商工会青年部がスタートを切った。



ソフトボール大会

平成17年6月25日・8月28日

平成17年6月25日(土)、篠山市商工会青年部が合併し初めての丹波地区商工会青年部連絡協議会ソフトボール大会が、青垣町のグリーンベル青垣にて開催された。篠山市からは6チーム編成し、うち1チームは優勝を狙うべく、精鋭を集めドリームチームを結成して大会に挑んだ。その結果ドリームチームは順当に勝ち上がり、参加15チーム中見事優勝の栄冠に輝き、県大会出場の切符を手中に収めた。

平成17年8月28日(日)、県大会に向けユニフォームを新調し、森本芳弘監督の下に練習を重ね、挑んだ県大会。南あわじ市健康広場で開催され、応援団も同行し大いに盛り上がった。

試合は開会式直後の第一試合で対戦相手は佐用町商工会青年部。やはり県大会ともなると地区予選を勝ち抜いた強豪揃い、トーナメント制という事もありグラウンドは緊張感が漂う。試合は中盤までは追いつ追われつの接戦であったが、終盤に相手の猛攻に押され、5回コールド負けという結果となった。

次回こそは優勝を誓い帰路に着いた。




KJ法による研修会

平成17年11月29日

平成17年11月29日に篠山市商工会今田分所において、KJ法を用いて新たな事業についての協議を行った。

KJ法とは、一見とりまとめようのない多様な事実をありのままにとらえ、それを構造的に組み立てることにより、何か新しい意味や方向性を発見するための会議手法である。今回は、商工会青年部の現状と将来についての分析を行った。

結果、組織強化と意識の向上には部員相互の理解が不可欠であり、事業を通じて部員の意識高揚と交流を図る事が求められている事の共通認識を持つことが出来た。

